

□6月23日説教(短縮版)「惜しまれる神」

ヨナ書3:1～4:11 隅野徹牧師

自分や自分の同胞であるイスラエルだけを、神が大切にしてくれると思った時は喜ぶが、そうでないと感じた時は不機嫌になり怒る。身勝手に、自分の思いがかなえられない、自分が正しいと思っていることが妨げられるとすぐに、「生きているより、死んだ方がましだ」と暴言を吐く。ヨナの本性として聖書が描こうとしているのはそんな姿です。ヨナ書は、滅びではなく正しく生きることを選び取ってほしいと、すべての人間の悔い改めを待っていて下さる神と、弱く心の狭い人間としてのヨナが、対照的に描かれているのです。私は自分がヨナと似ていると改めて感じますが、皆様はいかがでしょう？

今日の説教題に「惜しむ神」と付けました。これは11節の言葉からとったものですが、神が惜しまれた命はニネベの12万の人間や、数多くの家畜とともに、なによりヨナの命だということが、今回私には迫ってきました。

神がニネベに行って語れと言われたことに背き、いったんは生かされていることに感謝して任務を遂行するも、神のみ旨をさとるのではなく、どこか義務的に語り、相手を思う愛が欠けているヨナ。神が裁きを止められたことに一方的に腹を立て、唐ゴマが生えて枯れたことも、自分の都合で自己中心的にとらえたヨナこそ、神の怒りが下っても仕方がない存在であることを聖書は教えます。しかしそのようなヨナを神は愛されます。

ヨナ書は4章11節の言葉で唐突に終わっているように感じますが、ヨナもまたニネベの人たちと同じように、悔い改めに導かれたのではないかと思います。自らの狭い心を悔い改めて、新しく御言葉を語る者に変えられたのではないのでしょうか。

何度逃げ出しても、どんなに自分勝手な考え方が強くても、それでも神はヨナを見捨てられることなく、時には大きな魚や唐ゴマのようなものも特別に用いて再生させてくださるお方です。それは私たちがただ漠然と生き続けるためではありません。神の御心を成し、自分が愛することのできない相手にも神の御心を語る者となるようになるためです。神の愛の導きによって、罪深い私たちを変えていただきますよ。(終)